

2017年10月8日 礼拝メッセージ

聖書：使徒の働き 10章 9～23節

説教：神がきよめる

はじめに

墓に葬られたイエス・キリストは、三日目によみがえられた後、四十日間、そのお姿を弟子たちの前に現してくださり、このように語りました。「聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」こうしてイエスは天に上げられ、それから一週間たったとき、約束どおり天から聖霊が降り、その日、エルサレムに最初の教会が建てられ、地方にも信じて救われる人たちが次々と起こされました。このようにして「エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土」という御言葉は成就していきます。

しかし「および地の果てにまで」、言い換えれば異邦人の人たち、外国人たちも信じる、というところはまだ実現していません。それがどのようにして実現していったのかが今日開いている10章に書かれています。話は、カイザリアに駐在していたローマ帝国の軍人コルネリオが経験した不思議な出来事が発端です。この人は外国人でしたがユダヤ教を信じ、律法に従って施しをし、毎日の祈りも欠かしません。そのうちに地元の人たちからも篤く信頼される。そんな人でした。あるとき彼の所の御使いが現れ、「ヨッパに人をやってシモンという人を招きなさい」との声を聞きます。はて、これはどんなことなのか、コルネリオは十分にはわからない。しかし、神が自分に語ってくださったと信じ、三人の部下を呼んで、シモン・ペテロの所に遣わす

ことにした。それが前回までのあらすじです。

1 ペテロ

1) 幻を見る

今日はその続きです。場面は変わって今度はペテロの話になります。ペテロは地方にある教会を励ましたり、指導するために巡回していて、このときはヨッパという町にある皮なめしをしていたシモンの家に宿泊しております。昼の祈りの時間になったので屋上に上って祈りをしているときでした。急にお腹が空いてくる。下では食事の準備はしていましたが時間がかかる。どうしようかと思っっているうちに、彼は一つの幻を見ます。空からいろいろな動物が入っている敷布のようなものが降ろされました。そして「ペテロ。さあ、ほふって食べなさい」という声が聞こえてきます。神がこのような幻を見せて語っているわけです。ペテロはもともと食いしんぼうだったのかも知れませんが、わざわざこのようなタイミングで「これを食べなさい」と語る神も、なかなかユーモアがある印象もします。

2) きよくない物（レビ記11章）

それはさておき、ペテロは天から降りて来た動物たちを見て驚きました。というのは、そこにあるのはきよくない動物たちだったからです。それでペテロは14節でこう言います。「主よ。それはできません。私はまだ一度も、きよくない物や汚れた物を食べたことがありません。」きよくない物は食べては

ならない。ユダヤ人はそのことを小さな時から徹底的に教えられてきています。たとえ神の命令であろうとも、とても「はいそうですか」と言うことができません。

私たちはこの場面を読んでもぴんと来ないでしょう。最近ですが、ある人たちがカメムシを食べると聞いて驚いたことがあります。あんなくさい虫を口の中に入れるのを想像しただけで気分が悪くなるので、カメムシはきよくない生き物だと感覚的には分類したくなります。

しかし聖書の分類はそれとは違う。レビ記 11 章にきよい物ときよくない物の分類表が載っております。例としてひとつ挙げれば、豚はひづめが分かれていて、そのうえ反芻しないので汚れているから食べてはならないと書かれています。なぜひづめが割れていると駄目なのか。なぜ反芻しないとがめなのか理由は書かれていません。

これは律法の教えですから、理由はわからなくてもとにかくユダヤ人は守らなければなりません。ペテロもこの律法を守ってきました。それがある日突然、豚も食べて良いと言われるわけですから、戸惑うのは当然です。ペテロは「主よ。それはできません」と応えました。

3) 神がきよめた

これに対し、神はこのように語ります。15 節。「神がきよめた物を、きよくないと言ってはならない。」ペテロはこれを聞いてどう思ったのでしょうか。同じことを三回繰り返したとあります。「はい、そうですか」とはならなかったのです。神が語ったのだから、納得しなくても素直に従うべきだと思うかもしれません。ましてペテロは使徒という立場

にいます。クリスチャンの模範となるべきではないですか。もちろんペテロだってそうしたかったでしょう。でも体が言うことを聞きません。子どもの時から徹底的に教えられてきたことはすぐには変えられないのです。

例えてみればこんな感じでしょうか。日本人が和服を着るときのことを考えてみましょう。和服の襟については、暗黙の規則があります。「左前」はタブー。もし、そんな格好でパーティに出ようものなら周りの人たちに驚かれるとともに、パーティを台無しにしたとさえ言われてつまみ出されるかもしれませぬ。それほどのおおごとです。それを今日から左前も大丈夫ですよと言われても、とても怖くてやれない。そんな感覚に近いかも知れません。

2 訪問者

1) 思い惑っているとき

こんなやりとりが三度あって、ペテロはいま見た幻はたたいどういいうことだろうと思惑ってしまいました。お腹が空いていたのでこんな夢でも見てしまったのか。でも、どうも単なる夢とは思われぬ。気になってしょうがない。ではどんな意味があるのか、わからない。

そうこうしていると、下からなにやら声が聞こえてきます。誰かが尋ねてきたようです。そのとき御霊がペテロに語りかけます。19、20 節。「見なさい。三人の人があなたをたずねて来ています。さあ、下に降りて行って、ためらわずに、彼らといっしょに行きなさい。彼らを使わしたのはわたしです。」

2) 異邦人との交際禁止 (出エジプト記 34 章 15 節)

いったいだれが何の用事でペテロを尋ねてきたのかは、まだ知らされていません。ただわかることは、玄関に立っている三人は主が遣わした者たちであるということだけです。ペテロは玄関に降り、ドアを開けました。そうするとそこに立っていたのはローマ軍の三人の若い兵士たちでした。これにはびっくりした。びっくりする理由がある。28 節で、ペテロが解説していますので、そこを讀みます。「ご承知のとおり、ユダヤ人が外国人の仲間に入ったり、訪問したりするのは、律法にかなわないことです。」

ユダヤ人の律法にこんな定めがあったのかと驚くかもしれません。確かに出エジプト記 34 章 15 節にこうあります。「あなたはその地の住民と契約を結んではならない。かれらは神々を慕って、みだらなことをし、自分たちの神々にいけにえをささげ、あなたを招くと、あなたはそのいけにえを食べるようになる。」「その地」というのは、カナンの地に元々住んでいた異邦人を指します。イスラエルはこの律法を守らなかったため、後には国が分裂し、補囚となって外国に連れて行かれ、祖国を失ってしまうという苦い経験をします。後に補囚から戻って来たとき、祭司エズラが立ち上がり、もう一度主に立ち戻らなければならないと決心し、外国人をイスラエルの中から追い出したということがエズラ記に書かれています。ペテロが外国人と交際するのは律法にかなわないと言っているのはこう言う背景があるからです。なので、ペテロが玄関のドアを開けたとき驚くわけです。それだけではない。三人の兵士から次のことばを聞いたとき、もっと驚いた。「私たちの上司である百人隊長コルネリオが、あなたを自宅に招いて、あなたか話を聞きたい

ので是非ご同行願いたい。そするようにと御使いがコルネリオに示したのです。」

ユダヤ人が異邦人の家を訪問するなど、ユダヤ人の間では絶対にやってはいけないタブーでした。しかし、ペテロに語った聖霊は「彼らといっしょに行きなさい」と促します。ペテロだけではない。コルネリオも御使いから指示を受けている。これは単なる偶然もなければ、自分をおとしめようという罠でもない。神がなさっていることだと確信し、ペテロは翌朝出かけることにいたします。その先のことについては次回見ていくこととなります。

3 神

1) 異邦人にも

今日の箇所で考えたいことが二つあります。一つ目はペテロも驚いたことだったのですが、きよくないと思っていた物を神はいつのまにかきよめてくださっていたということです。この所で言えば、異邦人と交際することはとんでもないとずっと思っていました。けれどもいまわかったことは、もはやユダ人も異邦人もない。すべてきよめられているということです。いったい、いつきよめてくださったのでしょうか。主イエスはこう言われました。マタイの福音書 28 章 19 節。「あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授けなさい。」

「あらゆる国」とはもちろん外国人、異邦人も含まれます。このように言われたのは死からよみがえられて天に上げられるときでした。ユダヤ人も異邦人もない、すべて神の前にきよい者であるとしてくださったのは、神ご自身です。主が十字架におかかりになり。

きよい血潮を流してくださった、その犠牲によってすべてはきよいと言ってくれるのです。それが一つ目。

2) 聖霊の導き

そして二つ目。きのうまで汚れていると思っていた物を、今日から突然「きよい物だから食べなさい」と言われても、なかなか受け入れられるものではない。そんなとき神はどうされるか。神は直接コルネリオに語る、神は直接ペテロに語る。「さあ、下に降りて行って、ためらわずに、彼らといっしょに行きなさい。彼らを遣わしたのはわたしです」と教えてくださる。

このことは私たちにも起きます。もちろん直接声が聞こえるということは、まずはないでしょう。しかし、御霊が働きます。イエスが約束したのです。「わたしは真実を言います。わたしが去って行くことは、あなたがたにとって益なのです。それは、もしわたしが去って行かなければ、助け主があなたがたのところに来ないからです。しかし、もし行けばわたしは助け主をあなたがたのところへ遣わします。」(ヨハネ 16 章 7 節)

ペテロもコルネリオも聖霊に導かれ、やがて神のみこころが成し遂げられていきます。

私たちもおなじです。金曜日の夕方、黒須姉から連絡があつて黒須紀夫兄の病床を訪問することになりました。いったいどう話しかけたらよいかわかりません。その時主が教えてくださるだろうと信じて臨むしかありませんでした。体調のことを考えれば、長く話すことはできません。兄の顔を拝見したとき、私の口から出るのはこうでした。「黒須紀夫さん。あなたはイエス・キリストが救い主であることを信じますか。」この質問に

どう応答されるのか、まったく予想できませんでした。「わからない」と言われたら、そこで終わりです。しかし兄ははっきりと告白されました。「信じます。」驚いたのは、私です。黒須姉も喜びました。これこそが聖霊の働きである。私はただ聖霊が働かれている場に、たまたま遣わされていただけだったのです。

このようにして私たちを導いてくださる主の御名をあがめたいと思います。